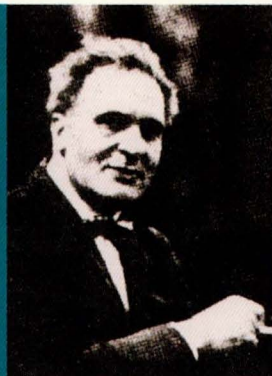




OPK2021



B
runo
W
alter

Vienna Philharmonic

Beethoven
Symphony No.6 'Pastorale'
Leonore Overture No.3

Mozart
'Eine Kleine Nachtmusik'

これこそ本物のワルター/ウィーン・フィルの音! 宇野功芳

SPの復刻はむずかしい。LPにしるCDにしる、今までたくさんの復刻盤を耳にして来たが、良いものでもSPの80パーセントが入っているかどうか、という感じだった。これはぼくだけの意見ではなく、SPを最上の音質で楽しんでいるすべての人が口をそろえていることである。とくにワルター/ウィーンSPは、同フィルの弦の音色がいのちだけに、それを100パーセント復刻することは不可能とあきらめていた。

ところが、今回のオーバス歳によるCDを耳にして、ついに厚い壁が打ち破られたのを知った。最上のSPを手し、最上の装置で味わうことは一般の人には不可能。その不可能を可能にしてくれたのである。「アイネ・クライネ」、「ジュピター」、「田園」、ブラームスの一番、いずれもSPと同じか、ときにはSPで聴く以上に美しい。そうだ、この音だった!この絶美の音で、われわれはワルター/ウィーンSPを夢のように味わって来たのだった。

ワルター/ウィーンSPの演奏 宇野功芳

「アイネ・クライネ」「田園」、ワルター/ウィーン・フィル。このように口に出すだけでSP育ちのわれわれには青春時代の夢や陶酔が蘇ってくる。「軍隊」や「未完成」も良かったが、ハイドンは曲がややマイナー、シュベルトは録音の鮮度が今一つだった。その点、「アイネ」と「田園」は誰にでもあまねく愛され、レコードもいちばん売れたのではないだろうか。特に赤い表紙にムギの穂をあしらった後者は、クラシック・ファンの家に行けば必ずあった。

「アイネ・クライネ」は36年12月の録音だが、同時期の「田園」や「ブラハ」に比べると音質が実に潤沢、透明である。弦楽だけ、しかも編成もいくぶん小さなものであろう、当時のマイクロフォンにも無理なく収まっている。オーバス歳CD化は絶美。こういう音で聴くと、最新のデジタル録音も含め、ワルターの「アイネ」は他を大きく引き離して断然トップだ。もう涙が出るほど美しい。

第1楽章は自在無礙、ウィーン弦は無限に伸び、典雅なのに冴え切り、最も洗練された甘さがしたたる。テンポは絶えず自然に伸縮し、間が語る。モーツァルトのセレナードとして、いやモーツァルトとして、これ以上、理想的な演奏は考えられない。

第2楽章も美しさの極みだ。アクの抜けた甘美な歌は指揮者が教こんで出来るものではなく、オケ自体の感性であり、音楽性である。モーツァルトと完全に一体化している。最後の三つの和音でむしろテンポを速めてしまうのも普通では考えられない無雑作さだが、その一つ一つにウィーン流の角の取れたアタックを聴かせてくれる。

遅めのメヌエットでは、トリオのヴァイオリンの美しさに、たとえる言葉を知らず。ウィーンの泡立ちクリームのようなフィナーレに入ると、しゃれたリズムとテンポが光り、フォルテではオケ全体がゆれるように歌うのだ。

「田園」といえばワルターである。一度ワルターに接してしまうと、他の盤はどこかに違和感がある。よそよそしかったり、重かったり、冷たかったり、粘りすぎたり。ワルター/ウィーンフィルで育ったぼくは、フィラデルフィア管弦楽団による再録音を聴いたときは、気分が悪くなるほどがっかりしたし、コロンビア響とのステレオ盤はずっと良かったが、それでも第2楽章の本管ソロの音がやせているのが気になった。もっとも、ワルター/ウィーンSPの復刻盤はあまりにも音が貧しく、長い間、このステレオ盤を「田園」のベストに挙げてきたが、オーバス歳CDを耳にして、久しぶりに往年の感激が戻って来た。これからは「田園」のディスクを聴くときは、やはり第一にこのウィーン盤に手がのびるだろうし、よほど音にうるさい人以外にはこれをベスト盤として推薦したい。少なくともコロンビア盤とともに座右に備えるべきだ。

第1楽章はテンポの自由で自然なこと、表情がいつも牧歌的で微笑みに満ちていること、弱音にこぐがあること、などが大きな特徴だが、とくに96小節で休符を長くとり、ムジークフェラインの残響を巧みに生かしつつ、次の本管のテーマをとけるようなピアノニッモでテンポを落としつつ歌い出す陶酔感が、とても西洋人の感覚とは思えない。再現部でフォルテに盛り上った第一テーマを、リズムを踏みしめつつ奏する節まわしもすばらしい。さらに、ウィンナ・ホルンによる木々のざわめきとコーダにおけるウラッハのクラリネットの美しさ!

第2楽章は終始豊かで高貴だ。音楽は一瞬たりとも途切れずに流れてゆき、旋律はこぼれるように歌われる。印象的なのは56~7小節のチェロのピッチカート、75小節の即興的なアッチェレランド、コーダの小鳥、ことにカッコウの夢のこだま!

スケルツォは四角四面ではないテンポとリズムが生き、つんとした音色のウィンナ・オーボエが小細工のエコーなどなしにソロを吹く。テーマがクラリネットに移るとヴィオラ、チェロが思い切った強さで応える、その生命力。そして何といってもトリオの速いテンポ(こうでなくては!)と、終結のトランペットの長いフェルマータ! 決して力まないウィーン趣味の「風」を通過すると、すんなり流しながら、おどろくほどのこくと粘着力を持ったフィナーレがつづく。いたるところからみずみずしい自然音が聴こえ、クライマックスのフォルティッシモでは大きなデクレッシェンドとクレッシェンドの波をつけるワルター式が懐かしくも嬉しい。

しかし特筆すべきはあっさりとし切り上げる終結和音であろう。なんとワルターは最後の四分音符をスタッカートにし、ノン・リットで終わってしまう。彼自身でさえ二度と行なわなかった、ウィーン風しゃれっ気の極みがここにある。

「レオノーレ第3番」はSP時代から録音の平面的なのが気になっていたレコードだが、本復刻盤ではその

欠点は是正されているのにまずびっくりした。是正というより、よほど状態の良いSPが見つかったのであろう。

序奏部から充実したハーモニーが極上であり、フォルテの和音のスタッカーティッシモはドイツとはまるで違うウィーンのスマートさである。主部に入っても決してどたばたせず、それだけにバランスが洗練されすぎているともいえるが、再現部からはオーケストラも乗って来て、颯爽たる進軍をつづけるのだ。

復刻に用いたSP

レオノーレ序曲は1936年の録音であるが、これは驚異的な響きが聴けるものである。日本盤であるが、力強い音は最初の一撃で実感していただけたと思う。後半になると凄みが若干欠けてくるのはアンプが温まってきたためであろうか。ただこの素晴らしい音もブレスの時期によるのか物足りないSPもある。

アイネクライネナハトムジークは一寸曲者である。手持ちのイギリス盤は低音がビシッと来ないため、物足りなさを感じさせる。日本盤は従来からのワルターのイメージに近い音である。ただ同じ日本盤でも音に差が見られる。一番の違いは低音の響きがアバウトなもの、低音の刻みがきちんと聞えるものという差である。クリアな方は高音側もそれほど甘くはない。本CDではクリアな方を採用しているので、従来とはまた違ったワルター像が感じられるのではないか。

なんと言っても「田園」はワルターのものである。相手がウィーンフィルとなれば文句はない。レコードも日本盤で問題ない。しかし、盤による音の差もあってとくに音の伸びに差が見られた。当然豊かな音を採用しているが、これは透明感も持ち合わせている。

ブルーノ・ワルター経歴

ブルーノ・ワルター・シュレジンガーとして1876年にベルリンに生まれ、最初はピアニストとして才能を発揮した。しかし、91年にパイロイトを訪れたのが指揮者に転向するきっかけとなった。初期のSPにワーグナーの録音が多いのはそれだけワーグナーの影響が強かったのであろう。

93年にケルンの国立オペラに雇われ、94年からはハンブルグの国立オペラに移った。ここでマーラーの下で働き、以後弟子としてマーラーと彼の音楽を支えていくことになる。単にブルーノ・ワルターとしたのもこの頃マーラーの忠告に従ったものである。1901年からはマーラーについてウィーンの宮廷オペラに移る。マーラーが辞任したあとも13年までウィーンで活躍した。ウィーンフィルを振るようになったのも07年からである。マーラーの「大地の歌」と第9交響曲を初演したことは有名である。

13年にはミュンヘンの宮廷オペラに移り、トーマス・マンとの知己を得ている。25年からベルリン市立オペラ、29年からはライプツヒのゲヴェントハウス管弦楽団の指揮者をつとめた。ザルツブルグ音楽祭での

活躍も始まった。

ナチス政権を避けて33年にはドイツからオーストリアに亡命する。ウィーンを拠点として各地での演奏が続くが、38年にオーストリアがナチスに併合されるとフランス経由でアメリカに亡命する。この間ウィーンフィルとの録音が多く残されたのは我々にとって幸いなことであった。

39年から56年まではアメリカの東海岸ニューヨークを中心に活躍、メトでのオペラ公演、欧州での音楽祭への出演もなされた。引退後はロスアンジェルズに住んだが、ステレオの登場もあり、彼のために編成されたコロムビア交響楽団との録音を62年に亡くなるまで続けた。SP時代の巨匠の中でステレオ録音を大量に残した唯一の指揮者となった。

Music and records

The main work of interest on this CD may be Beethoven's "Pastorale" Symphony, but the performances of "Eine Kleine Nachtmusik" and the "Lenore Overture No. 3" are no less impressive. The "Lenore Overture" was recorded in 1935, but the sound is still magnificent for its day. We are fortunate, as the sound of one of the original Japanese Columbia Records is very good.

In the case of the serenade "Eine Kleine Nachtmusik", the situation is not simple. The British HMV pressings, which we possess, lacked bass. The Japanese Columbias have much more impact. The sound of the orchestra is the one we are familiar with; the velvet string sound of the Vienna Philharmonic Orchestra. The reality is, different sets of the same performance, have different sound characteristics. For example, in one set, we can hear the double basses clearly, yet in another, they sound dull and distant. Which set to choose? We listened to several sets and ultimately chose the one with the clearest sound. Listeners, who are familiar with the old LPs, may be surprised because the sound will be different from what they are used to, but we think everyone will be pleased with this new transfer.

"The Pastorale" Walter recorded with the Vienna Philharmonic has been a favorite among collectors for years. Here again, from a number of Japanese Columbia sets, the most impressive sound has been selected for transfer to this CD. The timpani in the fourth movement have more impact than they ever have before. You will be surprised and pleased. The highlight of this performance is the slow movement. The transfer was sometimes very difficult, because Walter had a habit of starting a little slower than the tempo before the break. You may notice such gear change at some point.

Biography

Bruno Walter was born in Berlin in 1876 as Bruno Walter Schlesinger. His talent as a pianist was recognized at an early stage, but when he visited Bayreuth in 1891, he decided to become a conductor. His earliest electric recordings on 78s include many works by Wagner, perhaps because of this experience.

In 1893 he was engaged by the Stadttheater in Cologne and moved to the Stadttheater in Hamburg in 1894, where he worked under Mahler and became his greatest supporter. Walter followed Mahler and moved to the Vienna Hofoper (now Staatsoper). He conducted the first performances of 'Das Lied von der Erde' and later the Ninth Symphony.

He moved to the Hof- und Nationaltheater in Munich in 1913 and became a good friend of Thomas Mann. In 1925, he went back to Berlin as the musical director of the Stadtische Oper. In 1929 he succeeded Furtwangler as director of the Gewandhaus Concerts in Leipzig. He started to work with the Salzburg Festivals, but the Nazis forced Walter to move to Vienna and the resulting recordings with the Vienna Philharmonic became timeless treasures to all classical music lovers. He had to leave Austria with the advent of the Anschluss in 1938. In America, he conducted the New York PO, the Philadelphia Orchestra and the Los Angeles PO in his last years, but after retirement Columbia records organized the Columbia Symphony Orchestra in Los Angeles for him and made many stereo recordings.

オーバス蔵の音

SPをノスタルジアで味わうのではなく、満に刻まれた音、すなわち芸術および技術を最大限取り出すことを目的とする。SPの復刻にはノイズ処理をどうするか、ここに大きな課題がある。最近ではノイズを著しくカットした復刻が多いが、注意して聴くと音質がかなり劣化している例が多い。低音が抜けてしまったり、低音を補っても音が瘦せてくる。オーバス蔵の音はノイズ取りは原音を損なわない範囲の最小限の使用に限定している。当時の演奏家の表現を味わうに音楽情報を最大限に残したつもりである。復刻を受け持つ安原暉善は20年以上の復刻の経験から、温かみがありかつ生々しい音を取り出している。その音は英誌 'Classic Record Collector' で Realistic Transfer と評価されている。

Opus KURA

A recent trend in the transfer process, digital noise reduction is most remarkable technique. However, as Tully Potter, editor of CRC, says "too much noise reduction causes music reduction", recent Transferred CDs sometimes give us poorer sound, often thin and metallic. Opus KURA uses minimum noise reduction and maintains vivid and warm original music, therefore some noise exists depending on the record used. But we think music should be first.

*SPのノイズは盤の状態に依存します。盤質の良好なSPを借用できればありがたいと思います。

お礼は復刻CD程度ですが情報をお教え頂ければ幸いです。

オーバス蔵 Opus KURA

ホームページ <http://www5b.biglobe.ne.jp/~opuskura>

連絡先 e-mail: ts-aih@mh.biglobe.ne.jp

Fax: 044-944-6405 (+81-44-944-6405)

制作: 相原 了/オーバス蔵

復刻: 安原 暉善/オーバス蔵

マスター: 須賀 孝男 キング 関口台スタジオ

デザイン: 目崎 慎二 バースプレイス

発売元: オーバス蔵

販売元: 株式会社キングインターナショナル

取り扱い上のご注意 ●ディスクは両面共、指紋、汚れ、キズ等を付けないように取り扱い下さい。 ●ディスクが汚れたときは、メガネふきのような柔らかい布で内周から外周に向かって放射状に軽くふき取して下さい。 ●レコード用クリーナーや溶剤等は使用しないで下さい。 ●ディスクは両面共、鉛筆、ボールペン等で文字や絵を書いたり、シール等を貼付しないで下さい。 ●ひび割れや変形、又は接着剤等で補修したディスクは、危険ですから絶対に使用しないで下さい。保管上のご注意 ●直射日光の当たる場所や、高温・多湿の場所には保管しないで下さい。 ●ディスクは使用後、元のケースに入れて保管して下さい。 ●プラスチックケースの上に重いものを置いたり、落としたりすると、ケースが破損し、ケガをすることがあります。